

日本

ハンザキ研究所ニュース 2014(5) : 通巻 No. 101



発行2014年5月31日

〒679-3341 兵庫県朝来市生野町黒川292

Tel/Fax: 079-679-2939

E-mail: info@hanzaki.net

URL: http://www.hanzaki.net

NPO 法人 日本ハンザキ研究所 栃本 武良

.....

特定非営利活動法人 日本ハンザキ研究所 第6回通常総会

ハンザキ研が NPO 法人の認証を受けてから 5 年が過ぎて、例年どおりに 5 月下旬の総会が開催された。会場はミニホールと名付けたこじんまりした講堂兼体育館である。小学生の机と椅子は少々窮屈かもしれないが、年に一度の総会を機に整備状況も見て頂きたいからだ。今回も 30 数名の出席があり委任状も含めて会は成立した。朝来市長は直前の公務で欠席となったが、町選出の市議会議長と 2 市議、教育長、生野支所長そして今年から文化財担当となった埋蔵文化財センター長と市の主だった来賓が顔をそろえて頂けた。特に市議会議長さんは、前日に東京出張から急ぎ帰っての参加をしていただいた。このように NPO の総会への皆様の関心度はうれしいことだ。私も予定をあまり考えないで空いている日を回答していたために、前の日に三重県名張市のハンザキ会議が入ってしまいとんぼ帰りとなった。



鈴木コレクション

総会では、この一年間の報告と今年度の計画を承認していただくセレモニー的な性格の強い会議である。あまり面白くもないことだが法人としての義務であるためやむをえない。その代り、会の後に一般公開講演会と懇親会を開催することにしている。これまではウミガメ・クモ・ナマズ・コウノトリと動物の話ばかりだったが、今回は兵庫県立人と自然の博物館のタンポポ博士 鈴木 武さんをお願いした。黄色い花を見るとタンポポだとはか考えていない我々にとっては大変勉強になった楽しいお話を聞かせて頂いた。しかし、怪しげなハイブリッドのタンポポが校庭にたくさん生育しているとは驚かされた。来年は 5 年に一度のタンポポ一斉調査の年だそうで、5 年前の調査でタンポポ情報の空白地帯と言われた朝来市域では頑張らねばならないと思った。



写真1 鈴木先生のタンポポの話



写真2 ヤマノイモ (ナガイモ) の芽生え

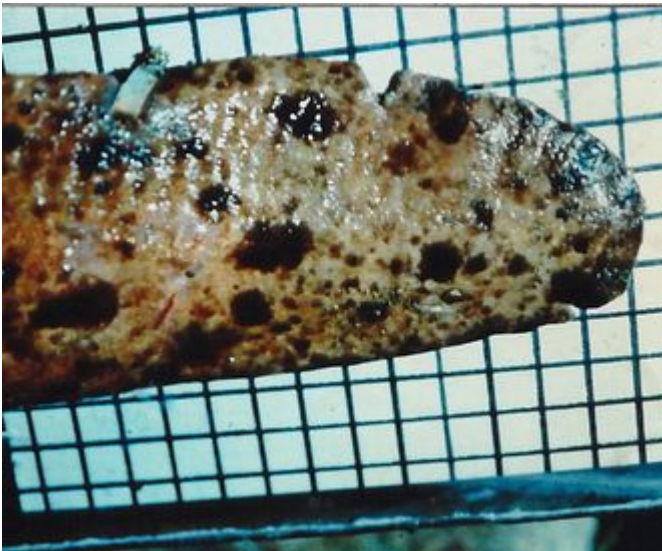


写真3 37年5か月追跡中のNo.110 (1977年5月)



写真4 No.110 (2014年5月) 全長690から860mm



写真5 切り倒されたタラの大木



写真6 路上に転がっていたハンザキの骨



写真7 我がビオトープのバイカモ



写真8 メガネ・クリーナー

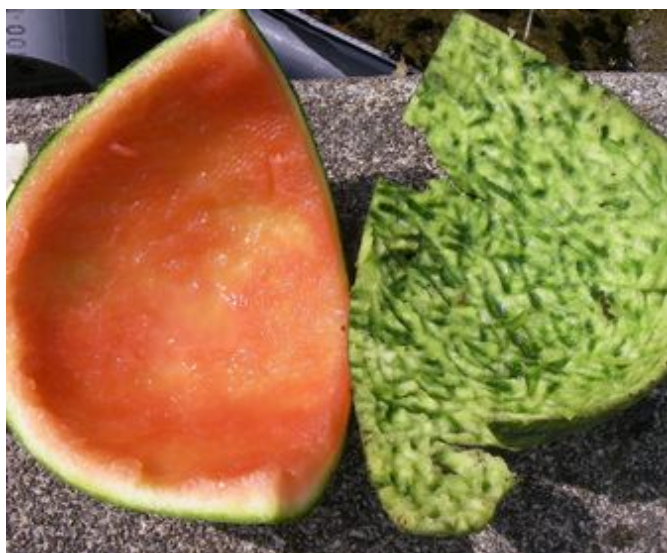


写真9 カラスに横取りされたカワニナの餌(スイカ)



写真10 初めて収穫したワサビのタネ



写真11 ゴミやしきの200万円の冷蔵庫



写真12 謎の物体

タンポポの話

皆さんはタンポポに色々な種類がある事を御存知でしたでしょうか？ 私は在来種と外来の西洋タンポポがあるということくらいしか知らなかった。20 種ほどがあると言われると季節の話題としてもタンポポの開花がニュースに流れることも多いが、どの種類なのか気になってくる。ここらでちょっとタンポポを勉強したいと、良い機会だとばかりに講演会を開催することとした。

講師は西日本のタンポポ調査を実施している兵庫県立人と自然の博物館の鈴木 武先生にお願いした。5 年ごとの調査であるが、前回の 2010 年の調査では 19 府県から 7 万 4 千件を超えるタンポポが集まり、在来種 12 と外来種 2 種の 14 種が確認されました。兵庫県では約 6,200 件のサンプルが集まり、10 種が記録されています。圧倒的に多かったのが在来種のカンサイタンポポで、外来のセイヨウタンポポもそれに近い数が確認されています。その他には外来のアカミタンポポが 3 番目に多く、シロバナ・ヤマザト・クシバ・キビシロ・セイタカ・トウカイ・シナノタンポポと続きます。

外来種が 60%を占めており、人口密度の高い開発の進んだ場所ほどその割合が増える傾向にあるようです。特徴的なのは県南部にはカンサイが、北はヤマザトとすみ分けており中国山地によって分けられているそうである。実際に長野県のラージヒル・ジャンプ台からタネを飛ばしてみる実験をしたら意外と数 100 メートルしか飛散しなかったとのことでした。皆さんも子供の頃に一度は息を吹きかけてタンポポのタネ飛ばしをして遊んだ経験があるでしょう。風に吹かれて空に舞い上がり何処までも飛んでいくのかと思っていたがそうではなかったようです。陽の当らない森の中では育たないからということも大きな要因になっているようです。

面白い話に、大名の国替えによって部分的に変わった分布が城の周辺に残されているのは堀や壁で守られて敵が侵入しにくいと同じようですね。殿さまなどの愛蔵の植木と共に一緒にタンポポも国替えしたのでしょうか。黄色の小さな花は皆タンポポと誤ってのサンプル送付もあったようですが、柳に似た葉を持つヤナギタンポポのようなタンポポではない希少植物の名は紛らわしいことですし、ハウレンソウと俗称される葉っぱのふさふさした物や、分類の重要なポイントになる総苞（花の下外を支える緑の部分）が反り返っていたり、顕微鏡で花粉を見ると形や大きさが不ぞろいなのが外来種だそうです。しかし実際に観察してみるとどっちなのか判断に苦しむ物があり、ハンザキ研の校庭にも「気持ちの悪い雑種」がたくさん見られるとのことでした。

タンポポ・グッズ？も見せて頂き、最近人気のダンゴムシやカタツムリ、小ネズミの話もして頂き大変楽しい講演でした。ところで、タンポポの花茎が 70 センチにもなるのには驚きました。ハンザキ研の校庭の草むらで見つけた物ですが、最長記録はどのくらいなのか聞き洩らしてしまいました。タンポポの葉はてんぷらやおひたしなどにして苦みを楽しんだり、根を使ってタンポポコーヒーを味わったりするそうです。

出会い

人の一生は信長時代の 50 年から今では 80 年に伸びてきたようだが、長いようで短くもある。東京での 25 年間では、数年前に教え子の元・生物部員たちが「おれたち還暦になつたぜ」と何人かがハンザキ研へ遊びにやって来た。改めて考えると私は 7 歳年上だから、彼らが 60 になるのは当たり前のことだ。たったの 2 年間の付き合いが、その後の長い人生を通じて、会えばすぐにタイムスリップしてしまう関係である。

先日、栗岡 誠司さんから一冊の本が届けられた。心当たりのない名前であったが、同封されていた手紙から 50 年近い昔、兵庫県立姫路東高校生物部員として姫路市立水族館に泊まりがけで実験をやったということで、そういうことがあったことを懐かしく思い出した。私も 20 代で若かったが、県立高校の校長を定年退職し現在は常盤大学で化学を教えていると言う。本は神戸新聞に十数年に渡って 600 回以上も続いて連載されている“理科の散歩道”から化学の分野を集めた“化学のみちしるべ”であった。当時、生物部に属していた栗岡さんに「なぜ文科系進学コースなのか」と問いかけたようだ。その言葉が心のどこかに引っかかったのか化学を専攻することになったと言う。そんな昔のことは全く覚えていなかったのだが、何気なく私が言った言葉が、心のどこかに残されたのであろうか。年齢的にも私が顧問をしていた生物部員と同じくらいなので、気軽に話をしたのだろう。

また、私の嘱託館長時代に神戸新聞社の編集委員としてその夏に定年退職する中込 治 記者の訪問を受けた。何かと思ったら、これ又 40 年以上も前に、新人記者として姫路支局勤務となった駆け出し時代に水族館での取材で大変にお世話になったとのことであった。はて？そんなことがあったっけと怪訝に思いながら当時の思い出話をしている内に思い出すことがあった。それは失礼ながら、この記者は生き馬の目を抜くともいわれる競争の激しい取材合戦には向かないのではないかと思ったことがあったのだ。無論、20 代の新米記者から定年間際の何とも言いようのない枯れた独特の話ぶりと飄々とした良い雰囲気を持つ人物とは一致しなかったが、中込さんは中込流に人生を送られたようで嬉しいことだった。用件は、最後の仕事として担当していた“定年世代のコーヒー・ブレイク”（単行本としても世に出ている）という定年 4 日前までの連載インタビュー記事に私を選んだということだった。新聞に載った大きな私の写真と大きな紙面には驚いたが、これも思い出深い出会いだった。

このように、長い人生には思いがけない方々との出会いがあるものだと思う。こちらが意識しなくとも、相手に何か印象付けることがあるということだろう。教師時代には 22～24 歳という若さだけが取り柄で、教育者とは到底言えない状況だったことは、十分自覚している。東京タワーの展望台からほぼ真下に見える都会の高校生たちの目には、全く異質の教師とも言えない“餓鬼大将”と老教師からあだ名された人間が突然目の前に現れたことは強い印象を与えたのだろう。しかし、私は知識や経験が少なくとも常に全力投球をしてきたつもりだ。その姿勢は今も保っており人生のロスタイムを全力疾走している。

南九州バイク旅

事務局員 上田 洋

春の気配が日々聞こえてくる今年の 3 月に、いまだ訪れたことのない南九州への旅をバイクで実現させた。フェリー代金がほぼ半額になる 20 日夜に出発し、24 日朝帰着と言う船中 2 泊、現地 2 泊という強行軍であった。心にとめていた「えびの高原、霧島、桜島、佐多岬、都井岬と日南海岸」を走破する行程です。体力の残っている今のうちと言う“爺さんライダー”の旅です。

出発は雨の中、自分ひとりの楽しみを神様がお怒りになったのかもしれませんが。自宅からフェリーの出る大阪南港までは雨合羽での走行。出だしの天候の悪さに「神様御免なさい！」と心の中で謝ったのが聞き届けられたのか翌朝の宮崎は晴天となり「ラッキー」とばかりに走りだす。宿泊目的地の霧島神宮前 YH へ向かって愛車にまたがり「ブルードド」と出発。海岸沿いに南へ走って青島、日南海岸とコバルトブルーの海を堪能しつつ、日南市都城市小林と過ぎてえびの高原に到着。

初めてのえびの高原は、前日の季節はずれの寒気で山頂は雪景色、これをバックに記念撮影。寒さに凍えつつ再び愛車が「ブルードド」と快調に走り霧島神社へ向かう。宿には少し早目に着いたので、夕食までの時間を使って霧島神宮に参拝し健康を祈願しておく。宿に戻って早々に夕食、入浴してあっという間に疲れのためか爆睡する。

普段の行いが良かったのか翌日も快晴。ぐっすり寝て疲れも吹き飛び出発。今日の行き先に向かって国府から海岸沿いに黒酢で有名な福山辺りから桜島が見えてきてその美しい姿に感激「綺麗だ〜！」と叫びカメラでパチリ。少し寄り道になったが桜島溶岩道路を走って海岸通りに戻る。錦江湾を横目に最南端の佐多岬へ「ブルーン・・・」と。九州最南端の岬であるが、寂れた観光地で食堂跡と灯台が見える展望台跡？があるだけだった。灯台を撮影して今夜の宿泊地の錦江湾サウスロード YH へ「ブルードド」と。3 日目は宿からロケット発射で知られた内之浦へ峠道を走り海沿いに志布志湾から都井岬へ。ここは野生の馬“岬馬”を見るために半島にある牧場へ。牧場で野生馬？と思いつつパチリとやり、目的の全行程を走破する。この都井岬の野生の馬は昭和 28 年に国の天然記念物に指定されています。日本在来の馬の形質を保っているということです。そして、再び日南海岸や青島の美しい海を眺めつつ宮崎港のフェリー乗り場へまっしぐら。フェリーでの夜は、今回の旅を無事に終えたことを感謝しつつ快眠。4 泊 5 日の南九州の旅を終えた。



えびの高原



桜島

ゴミ屋敷のあるじ

テレビで再々報道されたゴミ屋敷の御主人は、近隣の住民から嫌われているようだ。しかし、初めはもったいないという精神のもとに収集を始めたのだと私は思う。使い捨てが当たり前のような現在の日本人への警告ではないかと考えている。ハンザキ研の近くにくつつかのキャンプ場があるが、夏休みの過ぎた後にはバーベキュー用具一式が油とすすにまみれて残されていたり、簡居なパイプ椅子などまだまだ使える物がたくさんゴミ置き場に積まれている。

ところで、私は敗戦後の昭和 20 年代に小学校や中学生時代を過ごした、物資の極端に不足する時代に育ったのだ。小包の紐は切ることなく結び目を苦勞しながらほどき丸めてストックしていた。やがて、消費は王様などと囃したてる時がやって来て物もあふれるようになり、“捨てる技術”などといった出版物が人目を引くようになった。だが、私はいかに活用するかという点に強い関心を持っているので、これ以上ゴミを世の中に増やしたくないと思っている。私も“ゴミ屋敷の主”なのだ。

ハンザキ研の始まりがそもそも廃校の活用であり、ハンザキ研立ち上げの年に旧朝来郡 4 町役場からの備品の山はラッキーだった。空っぽだった職員室があつという間に事務室の姿が変わった。次々に閉校する学校や店舗などから多くの物品を運んで来ている。例えば、三脚付きの天体望遠鏡が残されていたが、私には星を眺める趣味は無いにもかかわらず、放っとけばゴミとして処分されるのでハンザキ研に運んだ。小学生の勉強机もかき集めて 50 席ほどを確保したが、最近閉鎖した塾から素晴らしい机といすが手に入った。これらの物は最終的にはお金を出して処分しなくてはならないので、持ち主も助かったことだろう。

別荘をたたむ方からは、生活用具一式やたくさんの工作機器を。閉店する電気・水道工事業の会社からはあらゆる口径の塩ビパイプの継ぎ手、電気工事のパーツなどを頂いた。また、洋菓子店からは素敵なショーケースや 200 万円もしたという大きな冷蔵庫や冷凍庫を頂いた。こんな情報もスタッフがあちこちから仕入れてくれ、一斉に運び屋になるのである。ショーケースは標本の展示ケースに最適だし、ケーキを展示販売していた大きな冷蔵庫は、これも展示ケースになる。バリカンと呼ばれる電動式の芝刈り機は、通路に生える草を最小限に刈り取ることができる便利な道具だ。自宅からも長い間使わなかった植え木の枝をチップにするチョッパーを運んで来てチップづくりをしている。燃やしてしまったらそれまでの木片であるが、小さく刻んで通路に敷いたり積み上げておけばよい肥料になる。本物の“ゴミ屋敷”にならないように常に使い道について考えていることが肝心なのだ。うまい使用方法を思いつき、それが上々の結果になると快感である。こんな訳でテレビに登場するお屋敷の御主人には私は理解をするのだが、増え過ぎるとあふれてしまいにちもさっちもいかなくなってしまふのだろう。ハンザキ研がそうならないように日々これ工夫のみと考えている。一方でビールを飲みつつプルタブを外して車椅子購入の一助となるように努めている 100 万個も集めるのは大変だが、チリも積もれば山となるです。

ハンザキ研日誌

2014年5月

- 1日 レンコン(姫路産)受増、湿地ビオトープへ植えこむ
- 2日 ・緊急ボランティア作業、4人でポンプピットの整備、近藤鉄工工事
・閉店した電気店から物品の搬入
- 5日 今年初のヤマビルに吸血される
- 6日 キノコ定期定点定量調査(横山先生他4名)
- 8日 ・モリアオガエルの池の藤棚整備(積雪で傾いたため)
・マコモ(愛知県瀬戸市産)の移植
- 10日 日本動物学会近畿支部研究会でハンザキの講演、県立大姫路キャンパスにて
- 12日 ・ギョウジャニンニクとジネンジョ(ヤマノイモ)植え込み
・田口理事夜間調査で37年5か月追跡中となったNo.110測定、最長追跡個体
- 15日 モリアオガエル初産(足洗いプール)
- 17日 ・ボランティア作業11名で
・公開見学会2組4人参加
・野田道子さんから献本(カラスネコチャック・毎日新聞連載)
・栗岡誠司さん(元・県立姫路東高生物部)から献本(理科の散歩道・神戸新聞連載)
- 20日 前田常雄先生植物調査4名
- 21日 総会へ向けて監査実施、大谷・堀内両監事と
- 23日 鳥取県八頭土木事務所と契約に(黒田理事と池上副事務局長)
- 24日 事務局会議8名出席
- 27日 ・自然再生学会の養父会長(和歌山大)他来所、来年の第6回大会開催要請あり
朝来市に打診
- 30日 三重県名張市にてハイブリッド・ハンザキ会議
- 31日 ・理事会並びに第6回通常総会
・一般公開講演会“タンポポの話”人と自然の博物館鈴木武博士
・生野中学校の英語教師3名(ニュージーランドの女性)見学に

.....

ハンザキ所長のツブヤ記録

とうとう禁じ手の“とばし”をやることにしました。当ニュースは現在No.93(2013年9月号)でストップしています。時間がたつと記憶も興奮も薄れてしまい、なかなか筆が進まぬこととなります。そこでNo.94~100は今後ポツポツと書き進めることにさせて頂き、できるだけ最新のニュースをお知らせすることを優先させて頂きたいと思います。何とか10年分120号までには間を埋めて完成させたいと考えています。言い訳になりますが、昼間の肉体労働が続き夜はバタンキューと言う状態なのです。申し訳ありません。